

## イブン・ナフィス (Ibn Nafis) による肺循環の発見

藤倉 一郎

一期会藤倉医院

肺循環の発見は興味があり、議論のあるところである。従来、セルベトス、コロombo、ハーベィらにより16世紀から17世紀にかけて肺循環から血液循環理論が発見されたと考えられていたが、1924年エジプトの医師アッ・タタウィはルードビッヒ大学アラビア医学史教室で学んでいるとき、ベルリン図書館でイブン・ナフィスの「アヴィセンナのカノンの解剖学に対する注釈」の中に、肺循環についての知見が書かれていることを発見した。

2世紀のガレノスは右心室に入った血液は見えない中隔の孔を通して左心室に入り、そこで空気と混合して精気を作り全身に血液を配分する。ガレノスの見解によれば静脈系は動脈系と分離され、見えない中隔の孔を通して流れるだけである。

イブン・ナフィスは彼の解剖の知識と科学的思考から次のように述べている。「右心室からの血液は左心室に届かなければならないが、その間には直接行ける道はない。中隔は厚く、ガレノスのような孔はない。右心室の血液は肺動脈を通して肺に行き、そこで空気に接し、肺静脈を通して左心室に戻る。そこで精気をつくる。

肺は1. 気管支分枝 2. 肺動脈分枝 3. 肺静脈分枝からできており、これらは粗孔性組織で連結している。

肺動脈は心臓にある薄く暖かい血液を運び、肺の血管分枝の孔を通して流れ、空気に触れて、この混合物が肺静脈を通して左心室へ運ばれる。

さらにアヴィセンナは肺動脈が心臓の栄養を供給しているというのは間違いで、心臓自体に血管があり、血流があるのである。」

つまり肺循環と冠循環を発見しているのである。

1553年セルベトスが「キリスト教の復興」で肺循環を論証し、肺静脈血が肺で生気を与えられ赤くなるということを報じた。しかし彼は彼の三位一体反対論から、この本とともに火刑に処されてしまった。

ベサリウスも1543年のファブリカの初版本では中隔の小孔を否定していない。しかし1555年の2版本では、これを否定した。

1559年コロomboは肺循環を報告している。

1628年ハーベィは肺循環を正しく報告しさらに体循環についても論及し血液循環理論を確立した。しかし、彼も肺の構造については推理にとどまり、イブン・ナフィスの見解と差異がない。

これらのことから肺循環の発見はイブン・ナフィスにあると考えるのが妥当である。

イブン・ナフィスは1213年ダマスカスに生まれ、ヌーリー医科大学で教育を受けた後、法学、神学、文学を学び、医学者であると同時に法律家であった。1236年エジプトに行き、ナースリー病院、ついでマンスリー病院に勤務し、医長を勤め、スルタンの侍医をつとめた。1288年死亡。すぐれた医師であったが、ウサイビアの「医師列伝」にはのっていない。ウサイビアはアラビア医学史家で399人のアラビア人医師の名前と生涯をのこした。これは最初の系統的医学史としてすぐれており、1245年に完成しヨーロッパにも伝わって有名である。ウサイビアはイブン・ナフィスと同郷人であり、医学校も同じであり、同じ病院の同僚であった。二人はダマスカスに生まれ、ヌーリー病院の医長ダフワールは共通の師である。二人はカイロのナースリー病院に移り、ウサイビアはその後、栄華の街カイロを離れ砂漠の果てのシリア大公の侍医となった。イブン・ナフィスはマンスリー病院にうつり榮譽をきわめた。ウサイビアの「医師列伝」にイブン・ナフィスの名がのっていないのは謎である。